太閤記

上

へ 2
4364
1

門へ2
4364
1

後言序

近時文運之不振世之其人矣其差師病儒自居者非汲汲射利之徒則必矻矻賣名之輩其所言多牽

強傳會守株畫足以為一
家之見鮮或多儲書每有
一事輒左右抽掠而傲然
夸辯博世亦多眩惑其說
而竦然欽慕焉友人瞋目

於斯佐書辨之名以後言
蓋有所後言也雖如抉剔
疵瑕無所容而實大方家
之藥石而眩惑者之金篦
也讀此書而耶其長舍其

短以知老師宿儒之為者
師病儒則其於知人鳳鑑
不無小補云爾天保辛卯
杪冬五日觀雷者漁序

人とよたてるをとこらのかきりをかたらひて
ちはやうこそうたのあるあるたえるきみ
ゆるみ有けるちちをおのゝ一ちうをたへえ
ちるこゝろの毋人のまことをもあむをいと
めきはこゝろをみかるる人はけいの物をの
人行ちはこゝろあるあれたるをもて
ひるをまかるを毋よいをあはちをことをきの

いろをこそ後すをあむ仍るをんるを
かをもあるをうろし毋をうこそ毋き
ちはやをこそちのようふをまるあるあやかいをて
あめ保をまるこゝ使のをみむつを

源彩

弓取
運ハ天ニあり
命ハ人をはゞ
よりてなり

祈ぎ
天の原ふ
祈づまりまつる

皇朝學者妙二奇談 上之巻 目録

上巻

聖徳太子平田篤胤を詈る

本居宣長海野幸典子を詰る

中巻

祐天大僧正小山田與清を呵る

太田南畝石川雅望を懲す

下巻

紀貫之岸本由豆流を嘲る

弘法大師屋代輪池翁を諭す

通計

7329

島田藏書

小説家大人著　門人　三國眞茲　穴栗田恒

同校年月

第一　聖徳太子平田篤胤を詈る

平田篤胤を復古の国學をとなへて。一世を瞞盱し。古事記の序ふ。参神作造化之首。とある句ふよりて。みづから造化参柱の神にしてこゝろもちふなる。世上の儒家佛氏のもべて狂人のごとく思ひて。ものいへばをよき事とおもひ。まが国巫祝乃ものいつのふ神道をあれども。儒を誹謗し。佛を摧破し

古医方をまなび。一大地球ことごとく。皆まな国の出店なるを
と説をなして。口をたくみ書を作り。近ごろ併法を魔事と称
し。天狗を狄鬼とまなびて。古今妖魅考といふものを著居
たるが。ある日空みそこのふかき曇りに天狗倒〜とおが〜くそ。
家鳴震動おびたゝしく。ものすさまじ。雷鳴おそいのふと驚きて。虚
空をきつと見てあるば。黒雲のたえるより。日月ひかる錦乃
御旗一流さゝゝあけて。天王寺れ聖徳太子。黄金の大よろひを
召し。角生ひたる甲斐の驪駒よ。白鞍おのゝて中央ふとゝのへ
た左ふ蘇我馬子大臣。右ふ春日皇子の子妹子大臣。甲冑を

着して相たゝるこのひ。跡見赤樹。秦河勝弓箭を取てかつ先ふ進ム。
雷鳴の家居はちかく下ゝのへた。雷鳴ちゝまを見て。是も笑めて。
天神たちの手ゝの妖魅を降伏せん。とまふこゝろざ〜を感じ給
ひて。天降ゝのふなゝんとおもひ。ふをゝよ歌ひ水をゝして。内牙
子どもふいひつけ。そきおゝ酒よおゝ洗米よと。槌で庭をく軽薄を
太子々笑ひおどら御覧じて。ほのくと天降ゝのひ。汐ちさだ
めて。天は神おどの天降ゝ〜と思ふべけきごさにあ〜ば。おろか
こゝ用明天皇の御子。上宮乃厩戸豊聰耳の皇太子なるゝさん
ぬるこゝろ。築地の太子堂類焼〜たるふよゝ分身の見舞ふ切

利天より降る序あるから。汝が不埒をこらさんためよ。今日より
く道寄もる物まとのめへば。萬亂不平の顔色まそ。それぞ〜苟
くも。朝庭の御民ぞて皇孫の姓を冒せるゆえ且ち国恩に答
へんこえ且を庸愚を諂さんこえよ。若きよりこのこと手筆を
こゞめば。目書を放ぞ。古傳をあきらえ古意を明すより外か。
一点れふ均もいこさびん。何事の不埒の出産して。市懲〜を受い
ぬき。といえ世も果ぞ聖徳太子。呵こと手矣ひめひまり一二乃
不埒を倫ぜん。先年汝が書こ玉霊の真柱といふまきあるの人の
歌か。だまされておどろく人のおろかさよ。から鉄炮の玉れ真柱と

詠〜ごとく。窮理をそ〜まあこのう。窮理乃窟中か入まて。臆度を
まつて人を誑惑〜たる書あれぞ。論ぎるかあよぞれこそ。中
ま。日を旋らば〜て。月と地と共か動まて。まばたたとへば舟か
乗まて海路をゆくか。人舟の動くを知らずして岸のうつるこの
ごく思ふは同じ。といふ新説を立たるふよまて世の文盲乃る者
ども。弥ら〜き説なりまと思ひ。置くとして相誹まて中々難破を
いとい嫌〜さる者もあるかなれば。あの説を。尚書緯の考灵
耀か。地恒動不止而人不知。譬如人在大舟中閉牖而坐。舟行
而人不覚也。と漢土の上古か。ものくさまれ説あまて事乃まて

世人この書を見ざるあり。汝の新説のごとく心えて、或を信じ
あるひを惑ひうるなり。汝明の孫毅の録したる古微書の中にも
ちと見出して、ことを発明の説のごとくいひなし、汝の師の本居
宣長の説と矛盾して一家を成さんと謀ること掌上に示るごと
し。また汝の俗称を大角といふことを軍法令に大角竹角及軍
旗、とあるを文や。倭名鈔に大角和名波良乃布江とあるに依
て、海中より拾ひ上し宛ある石の何のとなきを、天石笛とこの名
ばけてそれを吹うるふよりて、大角と名乗るより人ふをためし。
天石笛記とのいふ書やも書にらんしうきなれども。その

実をこのの役公小角この鬼神を駆役したる神変をもくらひ小角よ
り上ことんとの下ごろうして、大角と名乗しかるをさきぶことを寛吉
といふ天狗小僧を何國のらこの呼よせて、當人もとのみえぬ文字を
ちきるのこと、一人して吹く事もあらぬ長笛を作らせて人
を惑しまきこれこを徳を人に示して信伏せんとするの奸意山
事に非ずして何ぞやあふ世上もそい。汝を山師の学頭ところえ
たるべく発明したる古傳説の古意に符ひこのあるてに例乃山事
とおもふあ門人の外にも誰一人ことを上て見ん者もあ。こをこ者
却つてわこの国固有の大道口々に存し、戸々に傳へうる真傳を。

地ふ墮まぐきちまぎすして。憎むべきのを形ちぐ〜きものなり。然
るに汝金どのことを漢土の風を好みあひて。文字も礼義も彼
風を移〜さらきこゝろどもかく成り来たるまで。慨く恨〜き事の
極なるをおどろ〜古史の開題記とのいふものを書こゝ。金どの
像末の世の人機に相應まぐき見處あまて。儒佛を興隆〜る。
心腹を知らざるなるなりちぐめ推古の御時上古より有来る
古書へ漢字を填て神代字を刊るおろ漢土の昏へも漢字の
假字をはけて。論語の字をアゲツラヒカタラヒコトバと訓せふ
類の胷折なかく容易の事ふあらぐきうせ孩ぐ今の世ふ成

て。神代の古典を漢むものなく。漢土の昏をまが国の音訓ふ
よみおがえて。重宝ふまる事も出来ぬ事なれば。なほ漢土すても
ちぐめ象形。會意等の六躰の古文を作まるこの。ちぐ迂遠
なるこの。ふよ。史籀の大篆李斯の小篆ちまふ。なほ簡便よつき
て。隷昏八分楷法はまるつひふ劉德昇の行昏張伯英の草
昏とうつまるもこの形事の易きふちまこのべなるちのまだわこの
国神代字の婉嫚なる末世の急務ふあらざるこの。ふ刊まるて
漢字ふあてうるふ。日用簡便をちゆふの微意のこ。汝ちまぞふ
漢字をもちひて文章をなすふあらぐや。神代字用ふぐくを。

今こころふ用ひて見よ。誰も一人として読み得るもの有べからず。
余もまことより皇子なり。皇朝の古支実傳をよく後世に傳へ
ときは天皇記国記を作りて。日本紀おどの嗚矢と形容し
あまこび上宮太子全依経史之例。能勞文筆之體。おどく中古の
者も見えられあり。余も用明の御子。崇峻の御姪。推古の太子。
尊ときき事天子よ亜ぎ。神道を起復し。儒道を再興し。佛法を
張行し。その余百千の伎術諸工大このまろがの巧夫を離きるい
なきふ。汝一介の凡下。卑賤の匹夫にして。口むろく余を詈ること
おと。僭上无礼。孔子のいをある。其国に居てその太夫をば議

らず。といふ義にも戻れたれば。以て不埒なるいひ事あるべ返
答せよとのこまくべ。篤胤業火心頭よりも上きどもなるべ。みな手
出しせば。赤樹や川勝の音鍬ふこのけられんことを恐きちひさく
なりまて慎み居られ。太子あるこ宣たくさて寅吉ののちふ。勝五郎
といふ小児ごの再生したることを例の山支の口実にして再生記
聞とこのいふそのを書たるこの。この霊は真柱よ人の魂を産霊
神の賦まのふはくにして。死してを幽冥ふ属し。再生転生する
ものとなきやうふ説をこるこるは。再生の小児ごの話のたること
出来こ私方よりをこまて。俄ふ再生きあき事ありこたべ。や

いまうふ論じたるこそ。いづ尻口てそのをいふといふものあるを
それは漢土の古事を多く挙げあつらまつりの南岳の恵思禅
師の後身なりといふ本傳を。いさゝかも引出さざるを甚以て
その意得ず。まゝ実ふ恵思の後身ある故ふ。平氏の太子傳ハ
さらなりを今昔物語元亨釈書。その余の末昏どもふも挙たる
をまが国の古事をさゝむきそ。漢土の事のそいひしを。汝の平
生の見解と大牙せるふあらずや。さて古史の成文といふ物を
見るふ。日本紀古事記をさらなりを。古語拾遺延喜式をはゞ
め。いろくの末昏ぞあるひも世ゝ偽昏の論ある昏どもふ

あるあとまくゝ近来のその書ゝものふ載せて。事まぞも是を
古傳の存るるなりを。このきハ遠実ハ合つをなどゝたまぜふ書
集めて朝庭の記録宗源の古典どもをまが勝手ふ作文ゝ。或ハ
たゞ絶あるひもそのゝ文を欠き句を補ひてそつとまらゝく徴とこの
いふものを作りをそへて世ふ示ゝ。たゞ議論あるふ。古史
傳ふいふをゝるゝ。などゝ辺てその古史傳といふものを。何の
世上木をるやら知きぬ凡人ども不審ふたのふ事あつをても。
その門ハ入らずゝその説を学くをもらねば止む事をなゞ
て屏息ゝて居るとを志らびよきをゝ。仏ゑ古史微あるふ。

元人雖破〜えずおどろ。喋〜く大言を吐くを抑いの形ふ事
ぞや。孔子の集めて大成をといふこころを成文と名ばけさふ
ならんこのおろかの眼をそゑきぞえ古史叢とゐいふべき躰裁なる
を勅ををつて撰をたる紀記おどをば傍ふ〜て自家の作昏
城公然そ〜て講秋をるおどいいやを片腹いたきおとぐも
おを知らずやむの〜ある人涅槃経の異同を對校せ〜時。
金人夢ふ告げて大聖の金口みざをふ改むべのらばと呵〜
たる友よ恐きそを形ちあらさえんさきよつて今涅槃経
よ南北の二本あるを對校の有無よりてなを汝のきらひ

ある佛経の上をそさへかくのごと〜ほ〜て汝をたふごとく中古
まぞ大嘗會の時よ語部御前よはめをて上古の古事を
奏〜たるまが国の古傳いのんぞ汝の臆度をまつてこだをふ
刪補をることをゐんやこれを吾国をたつとぶといひながら。
いちぐ神典を乱るといふをのおを志このを一字一言の訓点も
またく〜ふ改むべきをのなく〜ざふこと安和年中ふ天台法相
の大宗論宮中ふそあを〜ほ良源大僧正ふ法華経方便品
ある偈文ふ若有聞法者無一不成佛の句を若〜法を聞く
おと有らん者を一そ〜て成佛せざふこと無〜と訓じるを。

法相宗の學匠松室の仲箏ゝ若し法を聞く者有ることなし無の
一ゝ成仏せずと訓えて法相の意をたてまつり訓点ふよりて意
のちがふことかくのごとし近ごろ荻野梅塢ごのそと吾黨のあ
ある人の議ふるこのひて法華経を校正し上木しる
ハよけきごとも異本ゝ校合を傍注ふも加へど自己のて簡そ
取捨しるおごとも汝ごの所行と相似ることなし常在靈鷲の金口の
種子を大倍凡下の身ゝてまたくゝふ用捨をふこといのでこの
教主の意を叶たんそのこらねならまもも小野妹子のごとて
来たる経のまごておいて別ゝ義屈ゝ入ふ辛苦いせねおこ

上

九

そのごとく紀記どもの古典の訓をまたくゝふよみあらこあ汝ご
意ふ解しよきゆうふ点したるゝ杜撰これよることはれをぐき
らまゝおこ仲景考といふこのちなどいかとよることなし牽強附會の
おとまて論じ屈ゝ足らざれださしたくなることかくいふ円時
刻うつる方これぎことふしておくべゝ以来ゝ山事をゆんて
汝ごの著述目録ふのせし乞盗ならぬやうふこころがけよこのつ
又みごことふ鬼神の情状を伺ひえこことふごていふこと勿こ
汝ごのゝくいふまろごの来こるを天神下降とこころえこふふ
どゝ佛頭ゝ糞を著くといふこのちこいのでこの情状を伺ひ

はべきいごとて所分を起しゆへ。馬子妹子左右に後ひ。
赤樹川勝警躍して。空際ふのぶらんとしのひをぶらやよ
萬亂。なんぢを浮浪人と笑くゝ侮よ。存外ある大家に居て。多
人数をやとふやうなるぶこのいえゆる山師の玄關をたゝ
きの米價のたつとくて。さぞ困るであらう。とかくと笑ひ
ぬひて。雲のうたゝ寝の所分を隠し。左衽のふ虚空に上まふ。
萬亂を癡あるものとく思ふるのごとく。愕然として目の上の
瘤を取らきとふこゝろもちわなまーのなか負ひ魂さのん
ぶーてむのーを雛未まて虜宗と淡ひ。狐変ひて二條太閤を

詰またたまきこのの上宮太子まも。大このさ妖魅の類あらんぬおもひ
切て妖魅のはもまふ。手きびしく論ひてえんとなふ附會の
あろぶーいよく憎まていねぶ悟らび。
たぶ頼む志めぢの原ふくべてハさも効なし紀氣吹の屋この形

第二　本居宣長海野幸典子を詰る

海野幸典ぬ。門人ふてふをはを示し。あるふ口ひの草臥しぶ。
とろくと眠られ。菱の中ふ紫元結ふてまとぶまを巻き。道
行ぶまれやうな衣を着て。葛の袴をきたる老人本居

宣長と名のりて座ホつけぞ。幸典ぬ〜だどろきて。うやく〜しく
座をたまはりぞき。それ〜翁の徳義学風をたくひ。こゝのら才
子と称して。なほも翁の歌文ホ長ぶ〜ぬへるを。主張いたし
ホよ。よくこそ本居先生さまとれ。といたまつ〜この宣長金秋
して。足下ホの生前の門人あら孫ぞ。孔子ホ竟辯を師とし
なふこゝろざ〜れのとづき。才子の礼を脩先らるゝこと。祝着
千萬なりぞといふべきぞ。手元来縣居翁の門ょ入りて。古への
道を振ひ〜ぞとぞ。縣居翁の遺意ぞ。歌ぶゝの事ホいたぶ
枝葉といふべきことれぞ。ホをはい古書をよみ文学ひ

上

とゝ学ぞの。一日もたゝぐでかなえぬ事ぬ。まづ紐鏡をもつて初
学をはぢと〜。さて玉の緒を作りて大躰をたゝ〜さるホ。足下
よく通覧〜て。手ホの玉の緒ょ漏ぶたる説の。あやまるまあふを
考究せらるゝことぞ。ぞ学ぞ。手ホの後説ホ〜て至極よろ〜き事
なり。ぞたゝ〜ぶは近ごろ。てホをはょ通達せらぞ〜を自負の余
慢心とゝん〜ぞ。天命通とこの天狗通とのいふものを書き。人ょ
示さるゝよう〜兼ぬ。ぞれよりび。手きさる席ぞて一見せ〜ぶ。何の
大きれる紙へ。アカサタナの五十韻字を書きて。箱の中ょ入れ
小札をとぞ出〜。何のぞばるゝあき。一言ょ生〜て千義語ょ

十

をたらく言葉を。小札そあちらへやまこちらへやまこゝへ行く
とかう轉ぶ。かゝこへ行けば。かうはくらく。といふやうに。目はぎら
〳〵く輝ゝてをたらのせらるゝ故よ。初學や愚昧固陋なるゆゑ
ゞも一驚を喫ひて。弥ら〳〵き事ゆゑ。一時に名を轟き
らきうゞも。上木して公行ふるといふうつさゞるを。
今ゆ世に示さまゞ。あまつさへ近ごろ。ゆれの筥も器も何処
のの隅へかゝ結果て。天語の天の字をいをきぬ。いとのなかこと
まや。大のこよく思ひて。ゆんきゝ。をたべて言葉のをたらきゆ。見下の
ごく器を書たる札を作るゝり。一言の下へ系畠を引いて。何

千言ゆゆ。たらくなゞこいふゆこを。ゆへね皇國の人々。誰もく。
用ひ則きはゝさらかゝ来ゞて。何となく覺えて居ゆことあきゆ。
さらゞ畠説を公行ぢん。とゝをとゝて見きゆ。いをゞゝと知き
事なる故よ。一時の名を書くるを勝誉ゝて。引こませられ
あるべゝ。ゆもよくをゆゆゞえぬゞ。見ルといふ詞ゆゞゆ。ラ行ゆ移
ゞて。見ラン見ル見レ。と活用なきゆ故ゆゞゆ。行を行ラン
行リ行ル行レ。知を知ラン知リ知ル知レ。とをたらゝ例よ准へ
て入をゞゆ。入を見りとゞをたらくべき格なゞといふやうなる説
もあゝゞゝとおがゆ。をゞてゝとばの八千街ゆゆきゆくことゝ。天

地自然の妙用いと面白き言霊のさちはふ国ゝなれば。古人も別に例なき言葉をみづから造りたるもとより。いにしへも見ラシとはのひ〜例あまた。見りとをいそづいるべきまうなれども。古事記をさらねば日本紀以下の国史祝詞宣命万葉の歌ども。三代集その他。うつは源氏のたゞひ歌物語の上にも。すべて一切も例ある事なり。もしはたらくべき格あらば。あまたの古昏の中ゆ。たゞ一度ばかりを用ひてあるべきもなしなり。例ひば射ル居ハなどのごとき。居り射りとを活用のごとき。足下手の影ゆ吹てゆをはを唱へ一家を成し

たるもまた除なれども。をのこの学問なき故。強説を出来ぬ所まち。手ごのこゝろぎしの。てゆをはは住せるを非ざるを弁へず。よく古昏をよみ。さて天語でも地語でも解のるがよ。千言万語たゞ章句を探る歌文章の上のみて悟ル所ぢきとゆあらば。まづ足下ゆ限らば。てゆをは家ゆたゞ章句ゆのみ泥むべき故ゆ。たゞ半行や一枚のうちの文を作きて。妍艶閑雅なるとらさてをき。文義法ゝて全部の趣意通らぬ事のあり。古学者流の中ゆ。そとかく議論したがなる。手ごの門人の中平田篤胤などゆてゆをはを知らぬ故ゆ論説

はくとおもふ事。実を撫育する造格あるまで。その門人
ゆも心ばくをのもなきと云えて。ふをは家の秘をこのむること
多きれども。手ゐおいて三川ものら甘心せぬなり。さてつのでを
やまとん。尾林元雄ぬ。てふをは家風を張る。旦下も初い
服役せらるさ侍やうと形まで。右の天語通ま賜されて。その
子を旦下の門人さ。秘奥を開ひるのちふ。元雄ぬ自已の
説なまと主張せられ。ものれをぐ以て卑劣なまやとまこの
天語通。人の説を奪ひておのの説ともべきかどの発明のこと
ゆを非ぬを。旦下の大声ふたびやのされて。右の卑劣をば行ま

きて形まるの法を旦下。龍王領下の珠を奪ちれるあとく怒
まで。絶交ま及ばれ。愚昧なんぞかくのごとくなれば。ぐきや。
手ゐ眼をもてんる例ゆ。漢人孟子ごいたゆ。五十歩を以て百
歩をもらふたぐひ。京極家の歌学を六條家ま譲せられ
ゐむと。旦下とのち門人を取るとま。和歌三神の像前ま誓
ふこと形どのあらきま。歌ものもとより自然の作意まく。詩を
虚を述るあと。漢人のいひもおれどく。古今集の序をんても
悟らるべ。さて今の世をとて古昏のち。をる覗きこて折乃
一首もひねま出ひやうま成ると。てふをはくと自家を立さるへ。

甚ごゝろよからぬ風なり。それも若狭の義門の友鏡や。殿村常久のかゝるべき門や。土佐の五藤正英とのいふ童子の綾のをひも。ほどいふたぐひをこそ吾ものごとを根株すて言葉詞花のこのごろまを委曲ゐ〜たるそのたれば。初学のためよ益なき事能たゞ。手ゆうきゝ〜くおのふ事ゆるふ加藤重春といふその。五十聯韻の号を五行をもて編ゞいろくゝ古事附の注を加へうるなどゝ殊更矣ふよ堪へる事ゆゑ。又今井中ゞ。得ゑよりまて経経るふよりて得とのいふ説をゑ。エヘウつとゝはのまて西洋人の名のやうゐふウルトフル。といふとだうまいふ

あゞゝ抱腹ゆきたくゞゑふエうそ。ちのも書名を矮屋一家言と題〜るいふゆも見らぬ名なり。松岡玄達ゞの本草一家言や。その右一家言と名ばけゝ例ふよまゆ形ちんゞのまゞく矮屋と冠〜たるもいのれる友ゞ。矮ゝ家の中限でいふとならゞ。を用の櫻木を費〜て。世ふ行ゝゞそもあるべきゝなゆ。ちのもこのきゝ諸侯の臣まてあゆゆゞら君よゆ賜ゝれる家を矮屋ゐゞ〜いふとゝ。失敬いふゞちのまも脇。ゑつとも已ゞの住む家なきゞ。高屋大厦とゝそのふべゝのら祝賜をれる家さゆゞゝ不足ゐらゞ。浪人〜て一家をなすゞのよ況なり。先年も書

物之尽の引札をくばるまで。同志の人の勧化を乞ひ〜ことあるも〜ふ書目の中ゟ学者必用歌学などまでふの。持でいあるおぼき昏名さへ載せてあるきさばゑまの書だまなくて。一家の言を形し。人をその門ゟ引誘せんとするゟ蠱惑を以て海を左かるふゑとく〜自高妄許のゑまげといふべ。これら旦下ゟ頑らざることを形ごらて。ふをは家の事なはいぞよや〜達〜おくなるまその意〜て旦下も研究いときまよ。手ごの歌ろ解釈よあやはゑまあるゝと論ぜられ〜中ふゟまたいふべきぬ〜ときふあらねどさのみゝくぶ〜く。旦下たちごのテケリケンツルシツ。ツ、キナバヌルシカなどて。ゑらくと多言ゟ〜口真似ゟ似て。海嵐の口のこそくせぬためしもあまばゑと座を起と見えけゑごの。音ゟぬゑぐまの鐘の音ゟてゆふ。愕然ゟ〜てたどろきゟ覺きべ。あゑまー宜長の形をなくて。ことべの玉の緒のこ残き系一片の墨爰なゑゟゑ。

玉の緒の長き脊丈や学ぶらんテケリてんはるつんかゆきの上

船士
このあたゞ
水を屋よりて

皇朝學者妙二奇談 志至うぢ中之巻

小説家大人著　門人　三國真弦　同校人　宍粟田恒

第三　祐天大僧正小山田與清を呵せ

松屋與清三縁山の學士となりて大小をさしてまゐり結城掛へを一川まへよ合せ昂然として門人どもを連き目玉乃祐天寺ふ参詣して大僧正の像堂よぬのづきこれ寺やと六善久院とよびのちふ今の名よ改めて俗よ引ねどを門人ふ語るゆゑ世て居さる体忽然として大僧正の像声を発して與清くと

呼びのひるまべ。この善光の脊中を借るくるふ。如来のどきでも
あるまい気。と與清大きふわどろきぶ。心をたびをたて元の
坐ふ直まるれば。大僧正のさはいく。甚方ねて手ご徳をたこ
ひ。相馬日記ま本傳を引いて。累女解脱のことをたんごろふ記
したるも。死霊解脱物語の杜撰あるふこの人ま。穿鑿まよくとご
きたまま。このも三縁山の學士ふなるまたる友。あとさら吾像前ま
ぬのばくこころざ〜過分ふ思ふなりと。この人ま與清低頭〜
て。それご〜いさふ国恩ま報ぜんのさ。報国恩舎と家を号
し。道のきぶりのち〜ま書も。人のさめまなるべきことをする一と

こころざけいまどまて。御賞悪言ふあづこのまてをやへうて恐き入い。
といひられば。大僧正のさはいく。その人のためませんとまふ慶
まま。このこうて世の害ふなる事多き方。ま必ま捨なれば謹ん
で諦聴セよ。そもくその方積徳叢談を書て。人ふ陰徳者ま
おのふまふまを見ばらんぶ。あまこ実を小谷三思を引ぶ。まを近〜
趣向なること。予ま三ま三をたきこまま。冨士根元記を作ま〜も。
冨士講の徒をまねづくる計畧ま。冨士講の崖の注をも書き
たるふ。三思まさる者なきべ。そのるふ家らざ〜ま〜ま。近ごろも
仇敵のごとく。罵ごふ〜ま〜ま。こまら世ふ衒ひ人ま阿ると以て。

賢大とゝろえ居ふ方ゝて。學者の耻べきことゝおもふべゝや。さきゞ書物藏を擁書倉と名ゞけゝ侯。擁書漫筆ふ。北史や世說新語補を引て。おとゞく申來をゝき。甚黨の者どゝの詩歌などを挙たる方。世の愚輩ゝ擁書の熟字。ちゞめて甚方ゞ用ひ出ゝたるやうふ思へどゝさふあらぢ。実ゝちゝめごろ死たゝ近藤正齋ゝゞ書齋を。擁書樓と名ゞけゝ侯。甚方おゝろゝて奪ひとゝゝ仙ゝ。よりて正齋ゝゞ事を紛ゝて絶交ちゝゝゝ。手ふ向ひてゝ爭ひゞゝこのゝん。正齋もゝこふる學才あゝゝ方。李永和ゝゞ傳などより。見出ゝて号ゝたるもゝ。

ちらぬ顔ゝて人を欺くことゝ。いちゞゞ盜賊の上まへことふちかゝ。おゞその上ゝ。藤井高尚ゞ松屋といふ号をゝ奪ひて自称せふ事ゝ。いつゝる事ゝや。ゝる漫筆ふ。山東京傳ゞゝことを論ゞて。醒ゞ學風考据を專らとゝて。世のなゝ著述家の類よ似ゞ。そのあらゝせふ骨董集ゝ。孫引の一ふゝだゝなきことをゝて思ふべゝ。おゞゝ誉ておきゝ。そゝこのふ京傳ゞ說を奪ひゝゝ何事ゝ。その說をゝいひ出ひべきなれとゝ。考ゝ門人どゝゝ居ふ方。その方ゝを客ふゝ地をのらんゝのとゝへゞ。恐辱の意をゝ以ゝ。その非ゝをゝたゝゝゝ。ゝたゝのゝゝゝなゝ。ゝて京傳ある會席

上ゐて。その方ご盗説を咎めて。この説々予ご発明なるを。足下自説として唱へらるゝとゝなれば遺憾なりといひしとき。その方はぎ〳〵しく大音ゐ予いとのぞこの足下の説を奪ゑん。何ぞ證拠あるやと居丈高ゑなりて説破したまへこのば。京傳を始めご逆上せて論議もとるうちゐ。持病の喘息大いゑ発して疾血を吐し。籃輿ゑたとけられて家ゑ帰まりご。ことより病て起りとゝなりこのば。つひゑ病床ゐ憤死したまきこれ其方ご事死令先さるゐ事。人あまこ知きゐまとゐ。京傳この事を予ゐ訴へて。寃罪をあからんとと歎きしゐ。このきご先年越後のあゐ

人の手をより。雨雪の事実をくはしく書綴まて。校合ゐ紙しるゞ。其人をあざむきて終ゐ欺さゞ。おのゞ著述の戯書の中へそうゑ是と書きはらゐて。見て来さゐうゐ人を欺きし。報恩なることを説さとして。このきをば何至のくしきゞよ。その方ご卑劣のこゝろをためゑさんとおりふゐ。ひゑこのせわく。心ゑ適して恥しゐ事ゞ。学海を無量なゑ。あゑよゐ人ゑこれい磐瀬醒ご説なゑとゝいそゞしして。自己の物ゐしたゐなるゞ。卑劣とゑ。ゑ識とゑ沙汰の限の穢行。彈指ゑ堪へるとなゑ。まゞてその方ハ見世学問して。書目と巻づけとて。何の著述をゑふさき。断見の

論あることなく。藏書自慢ふ過ざるのみ。自業のそのゝなかよ。
松屋主人こづからいとくの松屋高田子曰のと書ちらしたるい。
何といふ簡ぶるや。この清水濱臣と中よかまーわども。漫筆
ふ。ところぐよ巻頭て墨ぶぐら。竹一志舟氏の序文よ。左右のと
よ墨論たこ墨。乱酒の上といひあぐらたこのみ合同抵の喧嘩と
なーのちふ太田覃らがと墨をちして。やう屈く仲直まとなり
とき。學問よこうこの甲乙をのて。伯仲をさだめんかたおのく
不足のところあるべし。男子才一の勝負を男根の大小をくらべ
て造化よまをの世たるどのよしとして覃らのまこ氏をどひ。滿

座の中よて陽物をかゝぎ出し。濱臣の大太なをーふ屈伏して。
その方仲よさだまきふとき。例の南畝の。松の屋の松葉よりも
さゞ波や志賀の濱松ふとくたくまーとよみて大笑ーたまき。
必竟學問の上よて。甲乙をさだむるふ。陽物をこのげ出ひなど。
猥雑のことをかせるふ。根ゞの持操なきゞのいふとろて春
屋の日祭あそびふ似ゝ墨。學問沙汰を學問ざたの上をいて
どことぞ論議講究ー。このきごのみゞのきを吾ゞの長きを。折衷
ーて伯仲をさだむるをづあるを。賀惜ことあつこのあびつこ墨
と相ぶーて居ふ。南畝らゞの説柄よなまたるをれなり。

この余棟梁集や。俳諧歌論や。松屋叢話や。残月抄などもそ。いふべき事多のれどさのみ論ふ足らねばさはくなり。但しその方ゞ解狀のくゞくしくたゞなきことも。三樹考ゝ周の和名カハヤを解て。カホリヤなゞといひ。おどゝ説文ゝ剛ゝ清なゞと云ふ徐氏ゞ注ふ。いとくときを清といふそのゝ。その不潔常ゝあちふ。之を清免除ふべきを以てゝなゞといふ字義また一のひ。高岸より河ゝ臨む屋ある方ゝ。河屋といひ。古意ゝ反て。下學集の高野の説より。今一きそたゞなき解ゝなゞ剛果て香屋ならゞ。糞をよき香といふ歟きを。こゝ味噌も糞ゝ一

緒の説なゞ。かくいそゞ印土て牛糞香を塗ることなどを。証拠ふゝ庫であらうゞ。あきゝ別ゝ説あゞそこの引證ゝをあらぬこなゞ。大事の事あゞ先年墓相の説を主張して。支那の陰陽五行家の昏ゝ墓抄録して。門人どゝふ墓相小言を作らせ。まゝ東俯巳上の門人ゝ。別ゝ口訣をさゞふゝ。口訣さゞ。紗元。圓墓昏などの説を昏ぬきゝて人ゝ示ゝならんゞ。唐土の墓相家説ゝ。ちのぐゝの相の墓ゝ子孫ゝあらゞ公卿を出し封侯を出とゝあゞてあきゞゞ。吾朝の人ゝそのまゝ示ゝ事ゝ禁を犯とふちかゝとゝいふゞ。そもゝ太平二百余年の今。公卿ゝ公

郷の分封侯二千石の封侯二千石の分あることなれば。おのづから子孫をして。公卿封侯たらしめんとねがふ。主庶の分をもつざる乱賊の人なる。たとへいとのなる美相あるとも。大声ありいたきぬとなり。その方も官途の事をもつざる者ならねば。この口傳の巻物をもさだめし明こ地あい書ざるべからん。然るときは住居より北の方の墓ごのよりあざく。小言ありひしらしのなるとぞ。そもそも本山なども。芝から品川あたりの者ならでは。北方ふあくこらば。さきざる格別南西の旦方のあしきとりふ説をなさるるときはなり。ときらなれば禁忌より拘つることをもつざるや。もあるふ

その方ご説ふはどんさきて。改葬せしもの女ならば。大きふ難渋もあるものもあるべし。ときらなれば天下の害なる当時寺院おもく旦方おほきふよりて金一升の土地墓相のよき根よ好きだてをすることを。列侯貴人を田舎なしでは出来ぬとぞ。たとへその方ご口訣を得てもこのふ田樂石の一本も立ずばなる男の癖人を。改葬せんかも地面をせはしさるとて打きてかく時は家より不祥のことある。病人夭折火災盗難あるふとぞさればこそ墓相のよからぬ方あきとまふかけて。弥て衰えるもあり。全然ちのごろも。堪輿家相の説もあるまく。

勝手のまるき処へ窓をあけて戸をさゝぎて不勝手ゆする
ことをのみと心得るそのおもむき。ひとり家作は氣をもむさめよ。
身上を不勝手とする者ことふ多し。これらさく歎息のこゝぎ是
なるを。又いその方おこゝろよ。墓地はすぐまどつきて住持は難
儀するそのまゝあるよう。ゆゑ来徒とおもふ迷惑はゆゑと形是。
それおど墓相よくしきその方。何しふ子を先きるゆうの逆
あり年ゆゑ。ゆゑより穢土は住まゆ如夢幻泡影のみとして。吾
子の夭折はゆゑ。たゞ書面の墓相說をあげく。口
傳形どゝ形ふることゝ人をゝ形書をよゆゑ。自

詩の所為。ゆゑ形ゝぶをはぬことなり。ゆゑふこゝ八大田錦城の。世
上の家相方位の說をなすそのゝ流行をゝらゆゑ。種ゝの家相
書を著述して愚人をたぶらかゝゝふ術計をぬとんで。利を
射んと欲せるゝそ。その方をこゝぶる黄金家すてあゆ形ゝ尚
卑劣なる錢まうけをゝぶ癖あふゝ。ゆゑひふ死して有賊
餓鬼と形らんことうたゞひ形ゝ。おゝあふゝ。去年世よ半
ゝふ家藥師寺金石記よ。緣山侍學士と書ゝるゝ。ゆゝよ矣
ふよ堪へゝふ侍工形ゆ。ふゝ山の号ゝ。親緣近緣增上緣の三
緣をゝうて号ゝたる名ゝそ。その形らゝ三緣といゝゝれゝ。義よ

この拉ぶ。をつとも吾徒の中のそのもっとろえ遠ひして。緣山
といふたぐひもあまて。浄土列祖傳あどふや。いごとまく緣山
とのこ書ときどもこの書を杜撰かゆくて宗門寺傳とあいね
事あるかよまて。宗徒を孫重せぬそのなきべきぞらくいごべ。
そも緣山といひてよきはらべ。ところこれ東殿山をたぐ殿山と
ぞもいひてんよ。江戸の京あまり遠べこのらべ。をつとも徂徠や
南郭の詩どもを。緣山とも緣嶽とも三山とも用ふれども。
これい例の乱名家のをまだなきべ。例よ正べき事よあらべ。三
緣とも。ご語をなまを。俗なるふとふ思へまや。名を正まどの

學者の本意なるかよ。閑卷第一の乱名いこのんぞ學士の名ふ恥ざる。
まこ倭學士といふをかしきことなるまことまでの震旦人の多国の
譯者をほとむるもうふ見ぬ。多山の徒をふ印度人ならべ。
別よ倭の字のエまをふを及ぶぬエなまえよまこまいある武
士の前よ。帶劍して答えられこるやしんがうふ。大小の指たく
てまが山の學士となまたるかよそその根ざをを萬亂とふ山仕
ぶ。吉田殿をこらへて。學師とあまさふこらの思ひつきなるふ
べ〜。ささべこそ甚方ぶの真似して。そと甚方ぶの門人なまし。山
崎美成とこのいふ博識ふまとる男もある諸侯の家来分よ

なほ大小さまざまいろの段々してあるくを世ふるをかごのとと
あるいさて門人某甲ゴ書たるかうそふ山田再奥記とのいふ
書を作き。先祖代々有縁無縁の戒名をもらべ立てるへ百匹
ばかりの付施餓鬼をきそ。ちと外々のまろきやうなること。ふ其
節をへて配平一所書たなふ事ぞ。ちとぐ〳〵俗名雅名姓
氏別号を二とかほまで書て。四の日八の日の在宿をもるの
状の上書の完名ぞ。ちるもたふる。飛脚屋の出日の札。大坂
の金毘羅船宿の張紙めきそ。さらは学者の所行まあらび後
ふる戯作者ごものやうふ。面贊扇や生来合の短尺を書林う

出して書るぞあるべ〳〵なふとそさやうふ見解をくきそ。それた
三味線の考ちさらあほ書きあらちゑそのどもことぐく愚人
をまが博覧の舟ふのせて。漕ぎ債をおかくはんと欲する。早考
心のあんえてあんぐる〳〵さいらんのくなく。たねは本居宣長ゴ説を
破さぞ。ちろよからぜとといひなどら下総や常陸を遍へ。学問
あき形ひは出このけ〳〵物。田舎人をもるまいと思ふて。宣長らゴ
説を盗ゑ講じたるふきぐりてきみんつけらをて。鼠のごとく
逃帰きる形どもまとふんぐる〳〵おがえ〳〵なほまる。先年擁
昏漫爭ふ牛祭祭文をあげる形どい。その年の正月岸本

由豆流ゞの出板したるを見るごとに。三月より上木せんとのべ知らぬ顔して入きたりきたるごとに。校合の條ありまたあらざるとく見解なきまゝなれば和歌高名競の唄より。松ちふ〳〵くき山吹も黄色より咲くでうやいと〳〵。と由豆流ゞ肩をそつかの有なるを恥べきをたゞされど恥のつたなくもたけきごとく恥をそうて学問〳〵。たまく学士と成さる。まゞ山の名を穢さなこの三南无阿弥南无阿弥。と十念をさゞげけるゝぞ。與清。衫より冷汗をあぶ〳〵。渇仰して念佛をまゝ居しごとくくまば。ときいとのよ祐天寺の影堂ならぞ。権之助阪の田甫なるけを。

與清おどろいて眉毛へ唾をつけて居きゞ門人どもは笑ひて。先生。眉をかぬら〳〵はさるゝはゝ及びまゝまい。世間の人ゞ化のさまして居まゝあら。

川船の船頭いとのふ多けきべ小山田までも漕ぎのぼるらん

第四　太田南畝石川雅望を懲を

蜀山人。仙境よあまて閑暇のあるまふ。むの〳〵の門人たまて。六樹園雅望ゞの家よあそびよ来まて〳〵のば。雅望まろこんで座小請ゞ。賓主の礼おたまてのち。南畝すづいふう。足下兼ての

著述はざるめをはびを。近ごろ上木さるるの写本うつく
あまーとも相遠して削らるーとおぼきをなんぞや。雅望
ここて。寫本うて傳ふるあひだをかくも。公行を示日ふ
なるまてもさそうとーく。嫌疑を遠ざけんこそよ。ぬきたる
正文くいなりとめつ。南畝子もさのうふ思ひーまいをなる。
それよつき本居宣長のおとを。伊勢暦をもちりて。彼の古
事記を考学とーて漢学を破きることをふくこ。伊勢こ
きの落話を作らきこうふ。滑稽もさるをとうて。ねざえのもき
びの写本よ。真暦考玉くーげ玉のりまなどいふ書ども。読

むよ堪ざる僻説どもおほ母の至。まぶ児孫たらんそのらへめめ
このふ説よはよふをとなこのをといひ。和学者忘きられーハいこの
みぶどく憎くーく書きこる放。宣長きらひあるべく。人も思
ふこころよ。先年このの人源氏物語の注をーて紫文要領源
氏年紀考おといふそのを草稿セるを。足下ゑそかよ伊勢の
ものの人の許よ至ほて。その説をうぞひ。公然とーて源氏の講
秋をせらきーこのべ。人おとぐく新説よ瞞セられくめでたき
おとふおゆひ。をでよ真顔も甘心ーて。足下の説を笑きこう
行うき。そのち宣長。右の草稿どもを。玉の小櫛と号けて

出板せしめし。源氏の注。足下の説ならざる事。世まあらはす。真顔を彈指して。そのころきたなきをいきどをり。足ひま二十年来絶交したるを。近年ゆゑありて家根屋静廬らの取持て。中直りせしこと。足下さだめておぼえあるべし。僻説のこと多きゆゑ。よりて児孫とるべきもの。その説を惑ふといふ断見ある足下。なほ尤その説のと多き和学者の説を盗み。自説のやうふせらるこしや。この面従をべき足下はあらねば。をれこれを以て意得ごとし。さてまた本居ごの。孔子の王を孔丘と書たるを。續日本紀を引て。文宣王の号を以て論じられさるをば。一應も

そつとまらしけきどす。一片の論といふものなり。和学者ごのいふごとくの事でなく。唐の代王号を謚したるのちよ。唐土の人も吾国の儒者も。文宣王といひしるや。官家もあづからぬ事を。孔子と称して。王禮の称号を書ざること。世まあるふ書物をみてもあるべし。孔子といふほどならば。孔丘といふも何ぞ妨げんやとよりその教を考ふる者こそ。おとさらふ尊称をも。面けき。墓ハざるそのふおいてを。格別の不敬もあらぬ。すでに釈迦を佛法の教主浄飯の王子なれ。世尊といひ佛と称して。浮屠氏たる者尊信し。続日本紀の宣命やら。聖武天皇さへ

三害の才子と称しぬひしこのどす。仏徒ならざるそのゝたゞ釋
迦といふこのおとく。まこと舎人親王をもとゝ皇子なりと。崇道尽
敬皇帝と諡号せられしこのどす。人形舎人親王とゝ仏あらま
ぜやこゝきらさまが朝の皇子なりと。まこの胡の事業は功勲おか
ぬ。さぞよ天皇の諡号をもらまゝだよ。原もまもとの御
名をもゝ。まこと傳教弘法の大師さちをもその徒ならぬ者ゝ
あり最澄空海とよび円光大師などゝ同流の一向宗ゆく
もらゝ法然上人といふよ非ぜやさまこが足下も孔丘とこそいい
弘あるべしの論の下よ。徂徠の事をいひて。孔夫子の賛ふと

いとまゝしならぜや。文宣王の称を上るゝらぶなぜ文宣王の
賛ふとも書けして。白虎通ふいい曰ふ。大夫とゝ人を扶達する
をものとある大夫相當の夫子といふ語をそなへて。孔夫子とい書
きたるぞ。王号のおとりあある人を。先生の称をいていふと
不敬あらぜとゝもべきや。孔丘と称したゝまとたゞ五十歩百歩の
たゞのひのこさきぜまこと玉てゝげの論の下ゆゝ舎人親王を安
麻呂もおのゞ。といふきこゝきこゝきら崇道尽敬皇帝もなど
といいふべのらぜゝの勢のおのづのら然らゝむるそのみゝく。
本居の孔丘といへるとまこと奚ぞ吳ならん。さまぜゝ人を論

まことにて自分のらあらざるべからぬまと形至。
実にたぐ宣長を憎むあるりふ前後を忘きうる悪悖と
いふべしと難破しくさび。雅望大きふいきどほる事も以前と
そ足下の教をうけしき。當時を台賜の宗といふんと守るを。
南畝さらひなおらオツト皆すべのさはふなそのの宗匠ゆく
いふべきことあるを真顔の俳諧哥を中興して世を一変しする
大功を称しのひて。宗匠免許の事あるを実ふ事が黨の
光彩といふべし。さのはよ足下。この狂てを手ご風を下さび。落
書雅の奥歌をよみて。真顔の俳諧躰よこのはらびなのつこら

英雄のこころざしあるふ似ることふ。真顔大宗匠と形至
とき。足下まあひ亜て。真顔の推挙して台賜を狂のひしふ狂
の欲してを下さきび。俳諧欲と称もべくを賜いらんと有このび。
百日の説法屁とりとなる至て。今すべこのきごの俳諧躰を唱
ふるをそ至て。牛角よ形らびたるを見きつひよ見識を
おとされて。唱へはけぬ俳諧哥の称号をかうぶる。真顔の驥
尾ふつきて。座をさだ先しを。旧来の見解よ反して。たぐ大名
をよろこべ所のこ。友よ今すべて足下まきこのひし判者どのの
中子を。足下を疎こて退きたる若き多この至しなる。手き実い

真顔と足下といづれの賢きぞと旦暮工夫したまへ。此度の不見識。このまゝ不ましきまゝ行をもんでだまめて足下の短をあらはぬおもひ合とゞきも。先年鷺丸のかたへ。今様職人尽のことゞ書。真顔のもとゞく形よ。雅と滑稽あまて。この親長郷の面目を襲ひ。ふ足下のもとゞ長くゝだくゝして滑稽をくゝ形くこの旧本の語調は似ど。一ゝ無ゞきなれども。あの通長くゝる方。とゝやもゝ自反してのきゝ考へ合さるゝのよきゝ。ことゝも足下のみゝのきゝとゝろなふを。名をいて人を嘲さるゝとも。庸人をむゝきなんゝの。具眼ろ

予などゝ微笑して居るまゝとなる。さゝはゞでなれゞゝ。ちのゝどろ真顔没したるのち。あれゞ台賜の宗匠ある。森羅亭万象ゞ。四方の歌垣を兼もちて。その風を行ふもよけきゝ。真顔の旧門人ゞも。万象をたゝこゞる去多き方よ。万象大きふ怒をたゝし。風流を辯ぜる詞といふものを上本して。あゞ新く人よ配をたるゞのまゝとふ拙文愚論。さたの限のものふして。予ゞの歯牙よりくゝあるよ足らゝ程ゞ。中やも愚昧をれゞゝきを事も。ニヨライの音を反切して。ノリといふ刃と約るといへゝなゝとゝ。音訓の差別をゞよわきまへゞ。ものなをまゝ普公の

両歌を引いて。祈らぬとてもの神や守らんと世に傳ふるてふ
なは遠ひのまくふたる。まこと論語の丘の講ふ工夫〳〵。といふ
語を子路のいめらんと請〳〵ゐるを五尺の童子も。論語を讀
者ゑ〳〵てを。知らざる者あるふ工なり。まこの所を子貢の事と
まて引證〳〵たふを。そもくいとのゐるあやまりぞ。これを暗記
乃失ゐりといちぐ。さばの王日本との文をだに記覚ぜ〳〵て。
その〳〵師といふ足らぬまこと漢籍の上のさだなりといちぐ。
引證まるふ及ばぬ工夫王。まこのもてふをはも知らぐとも。歌
だに正仏をそよゑんぐよきぬぞ。といへるあどへ。已のてふをは

暗きまを。おかいんとまる負惜をして。てふをは合ぜ〳〵てを。歌
ふをらぬ事をまらざるふすや。甚上をべての論弁をとぐく。
佛意を以てふをはを解〳〵。一向宗の勧化といふもの。法華
といふもの先きを。実は抱腹ものあ王たり。ゆ同流の宗
匠家ゆ余汁のまごとなれぐまゆ達〳〵な王さをまこと足
下のまみのまこの都のてぐふ王あどへ一時の狂文論ぜるれ
たら祝とる北里十二時を盤瀬京傳の青楼記る世界錦
の裏のちゆき本の九ど王なれを卑劣あらぐといひのこ〳〵。
雅言集覧いあま王大部ゆ今ら兵ぜぬの書まを求む

ところよりまことに。おどのしたがひぐ書きをかく本居の才子の大平
の序をたのみこしかきいやしき仏なを但し斎孫彦麿の名
義考のやうふ人の説を書ぬいてこの説よりやきをしやうか
一とち氣を付られこのよう。さぐて学業ち。真実よ居て世を
茶ふをかこのまきてらこの真面目なきどる。人を非まて人乃
説を用ふる愚若だまよく為ざかところ。向後眼目を美
のへぬへ酒を呑せねで酔ちせぬこの市免ぬへたあいくと。
いつ方へこの消失ちを雅望大きふ歎ていく。ことふ焼
たを論ぐらきさりいつそ真頼のやうふ死んざまはくこのん。

麻布でいなけまど六の樹ぐまきぬ飯盛なきて。杉子是親よ

皇朝學者
妙二奇談志まうぐの巻中之巻尾

宮内庁書陵部

Ms - 81